

世界の茶の文化セミナー

— 「受講ノート」(文責:市民活動団体“堺なんや衆”理事 前田秀一) —

「煎茶」の文化について

小川流煎茶六代目家元・京都造形芸術大学教授

小川後楽

小川流煎茶は今からおよそ二百年前、京都の小川可進(1786～1855)によって始められました。名は弘宜、通称可進、後楽と号しました。荻野台州に医を学んで御典医をつとめました。若いころから煎茶への関心が強く、五十歳で医業を廃して煎茶家に転じました。



わが国での喫茶の歴史は古く、煎茶は文人墨客の余技として古くから親しまれてきましたが、流祖小川可進は茶の真味に基づき「茶は湯を止むるに非ず、喫するなり」と主張し、もと医者であった持ち味を生かして、衛生的な合理的な独自の煎茶法をみ出しました。

ところで「煎茶」と一言で言っても、その内容について話するには相応の時間が必要ですが、本日は与えられた時間に応じて二つのことに絞りたいと思います。

一つは、江戸時代の末期には煎茶が広くもう一つの茶道として親しまれていたということです。昨层高視聴率を維持したNHK大河ドラマ「篤姫」、あの時代は、まさに煎茶が全盛のころでした。その煎茶が登場しないこと、これは時代考証的には問題もあり、また篤姫の嫁入り道具に煎茶の道具が有ったと伝えられています。このように江戸末期には、煎茶は盛んになり、とりわけ勤皇派の志士たちは煎茶を愛飲していたことはよく知られています。佐幕派が茶の湯(抹茶)をたしなんだのと対照的でした。幕末から近代にかけて活躍した文人の一人として富岡鉄斎(1837～1918年)がいます。鉄斎は、当初師事した人々や、交友仲間に勤皇派が多かったため勤皇思想に傾きましたが、幼少のころより耳を患っていたので志士を諦め、文人として身を立てました。



幕末の勤皇家・梁川星巖作



梁川紅蘭作

江戸時代中期以降文人の活躍が目につくようになりますが、彼らの多くはまた一方で煎茶を盛んに行っていました。その先頭に立ったのが売茶翁で、伊藤若冲や池大雅、上田秋成といった人

達も売茶翁の強い影響を受けています。当時売茶翁の肖像画も描かれましたが、煎茶をたしなみ売茶翁を崇めていた富岡鉄斎も、維新の翌年という大切な時代の局面で、売茶翁の肖像画を描いております。今日皆様をお迎えした煎茶席(お茶室「伸庵」)には、鉄斎とも交遊のあった、幕末の勤皇家梁川星巖・紅蘭夫妻の文人画を、おもてなしのしつらえとして二幅かけてみました。

もう一つの話は、煎茶の文字が使われだした歴史、その誕生の背景についてのことです。唐時代(618～907年)には、餅茶(団茶)を粉末にし、沸騰した湯に入れて煎(煮)て飲んでいました。だからこの時代の茶を「煎茶」と呼んでいたのです。宋時代(960～1279年)にはその粉末を茶碗の中に入れ、上から湯を注いで茶筴で攪拌して(今の茶の湯と同じ)飲むようになりました。そして、明時代(1368～1644年)になって、初代皇帝・朱元璋(在位 1368～1398年)が唐時代から続いていた“餅茶(団茶)”禁止令を出して、その後の“散茶”(葉茶)の発展のきっかけをつくり急須で飲むようになるのです。

唐代の中国では、陸羽(リクウ:733～804年)が『茶経』を著わして以来、茶のたしなみが生活の中に広がっていきました。しかし、それは文雅を伴う文人趣味の色彩の濃いものでした。陸羽の後、弱者にも温かい目を向けた社会派の詩人盧仝(ロドウ:775～835年)によって、文雅な茶は一層その精神性をたかめ、「清風」に象徴される脱俗隠遁の生活が、多くの文人達の共感を集めます。

日本では、平安時代に空海など遣唐僧によって茶が持ち帰られ嵯峨天皇に献上されて飲まれたことは知られていますが、それは、今に言う日常茶飯事のお茶ではなく、上層階級が風雅・文雅なものとして楽しみ、また一方薬事的なものとして飲む高貴なお茶でした。中世に至って「茶の湯」の基本が出来上がり、近世にわが国の煎茶の世界へとつながっていきませんが、日本における実質的な煎茶道の開祖とも言うべき人物は、江戸時代初期に黄檗宗「万福寺」を宇治に開いた隠元禅師とされています。

江戸後期になると世直しに獅子奮迅する志士たちに盧仝の精神が受け入れられ、初めに述べたように煎茶が一層普及します。煎茶が、今日のようにさらに日常的なものになったのは、第一次世界大戦(1914～1918年)以後、茶の輸出が減少してから庶民の身近に出回ってきてからです。しかし一方、煎じもの(番茶)と混同されるようになり、本来の「煎茶」の世界とは遠いものになったような気がします。

小川後楽氏 プロフィール

1940年京都市生まれ 小川流煎茶六代目家元 京都造形芸術大学・教授 京都在住
1963年立命館大学文学部日本史学科卒業。故奈良本辰也先生に師事し、日本近世思想史を専攻。
1973年小川流煎茶家元六代目小川後楽を継承。
1979年第一回訪中以後、現在までに約40回訪中、中国各地の名茶及び茶の文化・歴史等を調査。
著書:『煎茶の世界』(徳間書店)、『茶の文化史』(文一総合出版)、『文人への照射』(淡交社)、『煎茶入門』(保育社)、『煎茶の魅力』(中央公論社)、『煎茶への招待』(NHKライブラリー)ほか多数

